ミチコ・タナカ 男たちへの讃歌

角田房子

新潮文庫

ミチコ・タナカ　男たちへの讃歌

新潮文庫　草308＝2

昭和六十年二月十五日　印刷
昭和六十年二月二十五日　発行

著者　角田房子
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部（〇三）二六六―五一一一
編集部（〇三）二六六―五四四〇
振替東京四―八〇八番
定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

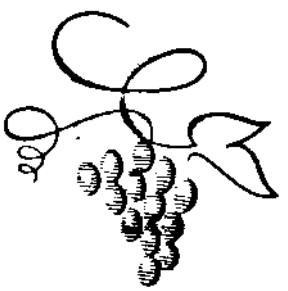
㊐　印刷・二光印刷株式会社　製本・株式会社植木製本所
©　Fusako Tsunoda 1982　Printed in Japan

ISBN4-10-130802-0　C0123

新潮文庫

ミチコ・タナカ 男たちへの讃歌

角田房子著



新潮社版

3367

ミチコ・タナカ 男たちへの讃歌＊目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

伝説の女ミチコと私……九
＊
ウイーン、ワルツに酔う美少女……一三
大富豪との結婚……四〇
初舞台「蝶々夫人」……六〇
〝灼熱の恋〟……八〇
ヒトラーの使者……九八
パリからベルリンへ……一二
第二の結婚……一四〇
空襲下の口紅……一六〇

ベルリン陥落……一七七
金の鹿ホテルの思い出……一九五
文化大使ミチコ……二一四
引退公演は日本で……二四五
夫の死……二七〇
粉雪舞うミュンヘン……二八九
＊
黄金色の森……三〇八
解説　十返千鶴子

ミチコ・タナカ 男たちへの讃歌（さんか）

伝説の女ミチコと私

カーテン・コールの中を舞台に迎えられたカール・ベームは、今まで「エレクトラ」幕切れの激情をひき出していた指揮者とは思えない老いの姿だった。リヒアルト・シュトラウスのオペラにかけては現代の最高峰とされる指揮者への拍手歓声は、いつまでも消えようとしない。隠せない疲れに体をこごめながらも、いかにもウイーンの芸術家らしく丁重に聴衆にこたえる彼が終始左手を握ったままなのが、それに気づいた人には奇異に感じられた。一九七九年（昭和五十四年）春、ハンブルク国立歌劇場である。

客席最前列の漆黒の髪の女性が、つと立ち上がって、もの馴れた派手な動作で舞台へキッスを投げた。濃い化粧も、緑色のロング・ドレスの着こなしも、この情景にふさわしく一分のスキもないドイツ風だが、容貌は明らかに東洋人であった。舞台のカール・ベームはこの女性の投げキッスを、敬意と親しみをこめた微笑で受けとめ、腰をこごめ、騎士の作法のように右手をさしのべて会釈した。

「あっ、ミチコ・タナカ！」

「フラウ・デ・コーヴァだ！」

などという周囲のざわめきを愛想よく受け流して、緑の服の女性は人ごみを縫って楽屋口

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

へ向かった。在留邦人か旅行者か、十人ほどの日本人がそのあとを追う。カール・ベームと親しいらしいこの女性についてゆけば、日本にも何度か来た高名な指揮者のサインをもらえるだろうと……。

彼女の席の近くにいた四、五人連れのドイツ人は、混雑が納まってから出ようというつもりらしく、腰かけたまま雑談を交わしていた。

「相変らず美しいなあ、フラウ・デ・コーヴァは。このあいだテレビで見たが、実物の方がきれいだ」と、白髪の紳士がいった。

「ヴィクトル・デ・コーヴァの未亡人ですね」青年の声であった。「デ・コーヴァはすごい人気俳優だったんですね、特に女性の間で……。うちの母なんか、今でも彼の死を惜しんでいますよ。だけどあの未亡人はすごいなあ。カール・ベームほどの大マイスターが、舞台から彼女一人に向かっておじぎをするなんて」

「いや、珍しいことじゃないよ」と、中年の男が答えた。「私はよく音楽会に行くから、彼女が今夜のように敬意を表されているのを前にも見たことがある。シュヴァルツコップはベルリンで引退公演をしたとき、舞台から手を延して客席のミチコ・デ・コーヴァと握手をした。もうピアノを閉じたときでみんな驚いていたが、実はこの二人は揃ってコロラチューラ・ソプラノのマリア・イヴォーギュンの折紙つきの弟子だったんだよ」

この音楽通が「珍しいことじゃない」といった言葉は裏づけることができる。田中路子は生まれおちて以来の贅沢な境遇と習慣で、いつも誰かにつき添われている。一人では何もしないし、できもしない。未亡人になってからも外出などには必ず弟子か、路子と親しい誰かがついている。その一人、ピアニスト室井摩耶子は語る。

「私はカラヤンやフィッシャー・ディスコウなどが、舞台からミチに向かってあいさつするのを何度も見ています。デ・コーヴァの未亡人だから丁重に扱われるということではなく、ミチ自身の力ですよ。彼女の顔の広さと実力とは、日本では想像できないほどすごいものです」

今もミュンヘンで路子の指導を受けている歌手宇治操は語る。「引退公演のシュヴァルツコップが舞台の上と下で田中先生と握手なさったのを、私はそばで見ていました。そのほか、クリスタ・ルードヴィッヒもペーター・シュライヤーも、ヴァイオリンのツッカーマンも……」

ハンブルクの歌劇場で、白髪の紳士はようやくすいてきた通路からロビーへ歩きながら、まだフラウ・デ・コーヴァの話を続けている。

「そう、それに彼女は映画にも出ていたな。もう昔のことだ。それにしても彼女、いつまでも華やかな存在だなあ。新聞がミチコ・タナカの最初の結婚を書きたててウイーン中の話題をさらったのは、私がまだギムナジウムの生徒（中学生）のころだったが……」

「まさか！」青年が大声でさえぎった。「おじさんのギムナジウム時代といえば、五十年も前じゃありませんか。あの若々しいきれいな人が、五十年も前に結婚したなんて！」

「本当だよ」白髪の人は青年をふり返っていった。「信じ難いことだが、本当だよ。音楽学校の学生だった日本の少女ミチコが、オーストリアの大富豪ユリウス・マインル氏と結婚したのは、五十年ぐらい前のことなのだよ」

田中路子は七十二歳（一九八一年＝昭和五十六年）、一九〇九年（明治四十二年）七月十五日生まれである。彼女は「あたしはもうご隠居さんよ」とスラッというが、その声はハリハリとしている。彼女はほんとうに若い。年寄りが若がるいやらしさは全く感じられず、自然である。いまは、一九七九年にベルリンを引き払って以来、ミュンヘンに住んでいる。

一九八〇年十二月、私はミュンヘンに滞在していた。そのとき路子は私に、ハンブルクで「エレクトラ」を指揮した夜のカール・ベームを語った。ベームの死の八ヵ月前である。

「演奏がすんですぐカールの楽屋へとんでいって、〝成功おめでとう〟のキッスをしたとき……」ベームはまだ左手の指を堅く握りしめたままであった。路子が、舞台でも気づいていた握りこぶしのわけを訊ねると、ベームは時計を見て、「ああ、もう済んだ」と初めて指を開き、照れたような微笑で路子にいった。

「実は、今夜は息子の初日なんですよ。ベルリンで……」

その言葉で路子には事情がわかった。ドイツには願いごとをするとき、親指を押えて握り

こぶしをつくる俗習がある。しっかりやれと人を励ます時も「親指を押えているよ」などという。

老ベームの長男カール・ハインツ・ベームは舞台俳優である。初日の成功を心から願う父ベームだが、ちょうどその日その時間、ハンブルクで指揮をする彼は西ベルリンの劇場に駆けつけることができない。そこで彼は、息子が舞台に立っている間、右手で指揮棒を振りながらも左手を祈りの形に握りしめて、息子の成功を神に願っていたのだ。

「息子ベームはピアノもうまいし、とても才能のある人よ」と、路子は長いつけまつ毛が影を落す頬に微笑を浮かべて、私にいった。

「ハインツは三度離婚したんだけど、その度にパパが大金を出して上げたの。ベームって本当はけちんぼなのよ。でも、息子をとても可愛がっているのね。

親子でも、夫婦でも、恋人や友だちでも、純粋な愛情で結ばれている人間関係って、本当に尊いと思うわ。いい人間関係をたくさん持つことのできた人生こそ、最高といえるんじゃないかしら……。その点、あたしは自分を〝しあわせな女〟だと思っているわ」

＊＊＊

私が初めて田中路子の美貌を知ったのは、記憶もおぼろになるほどの昔、東京で彼女主演のオーストリア映画「恋は終りぬ」を見た時である。いま年代表を繰ってみると、一九三六年（昭和十一年）の早春、二・二六事件の前後であった。

その後、第二次世界大戦前のパリで暮すことになった私は、路子の華やかな男性遍歴の噂をたびたび耳にした。路子主演のフランス映画「ヨシワラ」が、日本で国辱映画と騒がれたころである。「ヨシワラ」で共演した早川雪洲も路子の恋人の一人で、そのほか「十指に余る男たちが……」という噂を聞いて、学生だった私は目を丸くしたものだった。パリに日本のひま人が多いことは今も昔も変りなく、面白いだけが目的の真偽不明の無責任な話題が横行していた。

一九三九年（昭和十四年）、第二次世界大戦勃発後間もなく日本に帰った私は、その後の戦中戦後の混乱した生活の中で、田中路子の名前を思い出すこともなかった。

一九五六年（昭和三十一年）から、私は新聞社の特派員の妻として再びパリで暮すことになった。そして、久しく忘れていた田中路子の噂をときどき聞くようになった。だがそれは「日独親善に尽す民間大使」「日本の音楽学生の世話を徹底的にする親切な女性」「名優ヴィクトル・デ・コーヴァの妻として、あっぱれな内助の功」というような賞讃ばかりであった。

かつて戦前のパリ在留邦人の間で、のぞき見趣味と岡焼きから〝日本人ではたぐい稀な淫奔女〟のように語られた田中路子と、戦後の〝立派な女性〟ミチコ・デ・コーヴァとは、どこで、どのようにつながっているのだろうか――。私は大いに興味をそそられた。だが、やがて本人に会う機会が来ようとは、まして親しい友だちになるなどとは、思ってもみなかった。

一九六〇年（昭和三十五年）、パリでもの書き一年生になったばかりの私の許に、「文藝春

秋」から「ベルリンの田中路子を書いてみないか」という手紙が来た。私は大乗気で承諾した。

先ず予備知識を得たいと思った私は、駐仏大使古垣鉄郎をアヴニュー・オッシュの公邸（当時）にたずねた。私は友人の一人から「古垣大使は若い日の田中路子をご存じのはず」と聞いていた。

「私がウイーンで田中路子さんに会ったのは、彼女がマインル氏と結婚した直後のことでした」と古垣は語った。そのころの古垣は朝日新聞の特派員であった。「私は非常に強い印象を受けました。憂愁の美少女でしたよ」

その日、古垣が招待された席に、路子の夫ユリウス・マインルは十五分ほど遅れて来たという。それは、日本人同士くつろいで話せるようにとの配慮であった。

「その十五分間で、私はすっかり動揺したことを覚えています。ウイーンという街を、このまま離れがたい気持にまでなりましたよ」

なかば冗談ながら、実感のこもった言葉であった。最後に古垣は路子について、「痩せぎすな、清楚な体つきで、静かな微笑を浮かべているこの少女は、本当に男心を震わせる魅力がありました」と語った。

大使公邸からの帰途、私は古垣の〝清楚な体つき〟という言葉を何度も思いかえした。田中路子を、肉体的にも西欧の女なみのたくましさを持つ人と想像していた私には、意外な言葉であった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com